

「害虫(テッポウムシ)」

幹や枝元におが屑のような木の粉を見付けたら、
テッポウムシ(カミキリムシの幼虫)が居る疑いがあります。
虫穴を見付けたら小刀や針金で穴の入口を広げ、専用の注射器でスミチオン乳剤やDDVP剤などの薬剤を注入すると良いでしょう。

放っておくと食い荒らされ、幹の中が空洞になって枯れてしまう事があります。

特にカボスやミカンなどの柑橘類、モミジ、サルスベリなどに多くみられます。

これから木々の発育と共に害虫も発生します。

秋の紅葉や実りを楽しむためにも、日頃の注意と早期の対応が必要です。



一建落着



キッチンから見える場所に
ワンちゃんのお部屋を作りました。
「もう寂しくないわよね」と奥様。
さて、寂しかったのは、どっちかな?



山の湯 かずよ(長湯)

2階ロビーを模様替えです。



モノトーンに仕上げた内装。
気持ちがスッと落ち着きます。
アクセントは、柱に施した朱色のライン。



I邸(直入)

別々だった台所、食堂、居間を使い易くひとつにしました。
「明るい部屋で食べる御飯は美味しいねえ。
庭も良く見えるようになったしね。」
と満足そうな御主人でした。



発行人 川野和男
編集 川野組内
家造り匠の会

☎ 0974-62-2416
✉ tkk22@theia.ocn.ne.jp
✉ http://www6.ocn.ne.jp/~k-kawano



なごみ

『花の雪』

平安時代末期、

藤原俊成が、伊勢物語の世界に想像を巡らし

・・・花の雪散る 春のあけぼの と、春の美しい情景を詠んだ。

もっとも春らしい時といわれる、夜の明け始めるあけぼの、

舞い散る桜を、降りしきる雪にたとえた。

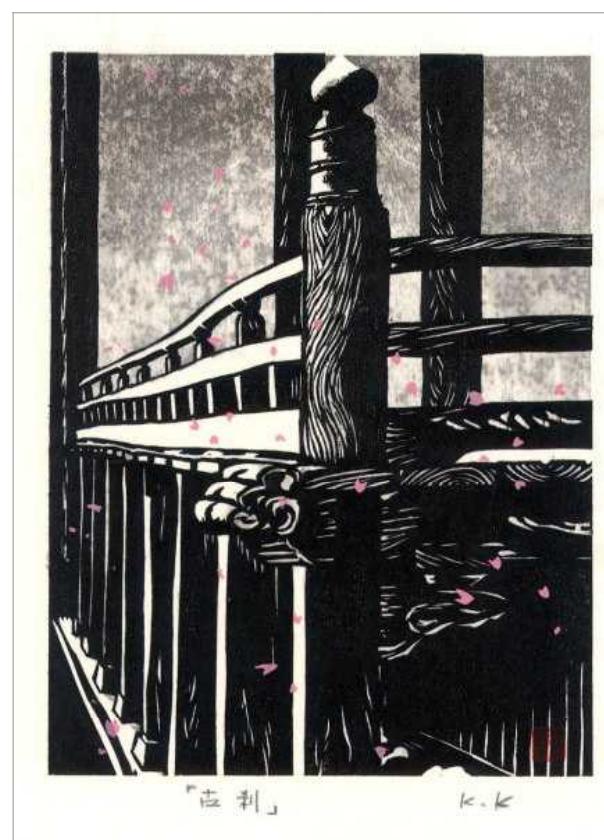
美しいとは何かを知る、更にそれを巧みに表現する。

後世、その和歌を踏まえた

尾形光琳の「桜狩蒔絵硯箱」が、また見事。

感動は、歴史の中で重なり合い、深まっていく。

ただのひらめきや思い付
きで、できるものではない。



旬の版画

春の陽ざしに誘われて
足を向けた満徳寺の境内

厳しい冬をくぐり抜けた本堂に
今年もさくらの花びらが
尽きることなく
はらはらと降りそそぎます

ちょっと季^クになるお話 ふきのとう

昨年、“春モミジ”(和No.28)に腰を抜かした我が家
の落葉に、今年も春がやって来ました。

観て下さい。そこかしこに顔を出した落の薹たち。
実はもっと凄かったのですが、夕げの天ぷらの事し
か思い付かなかつた愚か者(ハッキリ言って私は)
が手当たり次第に乱獲し、「そうだ!これを『和』
のネタに」と気付いたときには、この程度になつてしまつた。

それでも、生命の息吹が充分伝わつてくるでしょ。

植物図鑑によると、落は、日本原産で平安時代から野菜として栽培されてい
たそうです。落の薹には、咳止めや胃薬としての薬効もあり、漢方薬として
も古くから用いられています。落の薹が開いて花が咲き終わると、次は葉柄。
落の出番です。そういうえば、「落が花粉症に効く」という話も聞きました。
落の苦味の元のポリフェノールが、鼻水や目の痒みの原因となるヒスタミン
の生成を抑えるのだそうです。

旬のものを食べて、しかもアレルギーにも効くなんて最高じゃないですか。
でも、まつ、取りあえずは、今夜の落の薹の天ぷらに集中することにします。



里山探訪 やまの恵みたち

萌葱色の芽が次第にふくらみ、
春を感じる季節になりました。

これは杉林の中の小さな宇宙です。
腐朽の進んだ“ほた木”的上では、
椎茸と苔、そして杉の新芽の同居です。
自然の再生エネルギーを感じます。



休景たいむ 「いっぷく」時間の1枚



現在、工事が進められている稻葉ダムの建設現場をパチリ!
上流から撮ったのですが、遠近感が麻痺するような巨大パノ
ラマには、『いっぷく時間の1枚』とは行きませんでした。
写真の真中上部にダム堤体が見えます。
手前に広がっているのが、貯水池です。
完成は2年後だそうです。

知っ得？納得！ こんな所に こんな物

竹田で古墳といえば「七つ森古墳」がよく知られていますが、
宮城市用に、6世紀の終わり頃に作られたのではないか?といわれる
横穴式古墳群があります。

それは、崖面をくり貫いて作られたもので、市用周辺を本拠とする
農耕集団の墳墓であったといわれています。

今でも十数基が残っており、天満社の境内にそれを見ることができます。



左の画像の
で囲んだ場所に
古墳群があります。